

学生の自発的研修活動に関する基礎的調査(2)

鷹岡 亮・沖林 洋平・霜川 正幸・田中 理絵・源田 智子・久保田 尚・岡村 吉永

Basic Research on Student-Initiated Teaching Profession Training Activities II

TAKAOKA Ryo, OKIBAYASHI Yohei, SHIMOKAWA Masayuki, TANAKA Rie,
GENDA Tomoko, KUBOTA Takashi, OKAMURA Yoshihisa

(Received January 10, 2012)

キーワード：自発的研修活動、教職研修、特色ある教員養成プログラム、教職ポートフォリオ

はじめに

平成18年の中教審答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」では、社会の激しい変動や学校教育が抱える課題が複雑化、多様化しているなかで、教員に対する揺るぎない信頼を確立していくためには、養成段階からその後の教職生活までを一つの過程として捉え、その全体を通じて、教員として必要な資質能力を確実に保持するため、必要な施策を総合的に講じていくことが重要であると述べられている。そのなかで、教員養成・免許制度に関する改革については、「教職課程の質的水準の向上」、「教職大学院制度の創設」、「教員免許更新制の導入」、「教員養成・免許制度に関するその他の改善方策」、「採用、研修及び人事管理等の改善・充実」の5つの具体的な方策が提言されている[1]。また、教員一人一人が教職生活の各段階を通じてより高度な専門性と実践的な指導力を身に付けられるよう更なる改革が求められ、教員養成・採用・研修の各段階について改めて点検し見直すことが必要であることから、平成22年6月には中教審に対して「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」が諮問され、検討されている状況である[2]。

このようななかで、教員養成を行っている各学部・大学では、「教職課程の質的水準の向上」を中心に、(1) 教職課程に関するカリキュラム(教職や教科、教育実習関連の授業科目)の質的水準の向上(2) 学生の自発性を考慮した教職研修プログラムの充実(3) 学び続ける教員として教職ポートフォリオ等を活用した省察的実践家の育成(4) 大学教員の組織的取組(適切な役割分担と緊密な連携等)やFD研修を通じた教職指導の充実のこれら4つの項目に対して様々な改革が検討・実施され、さらに、特色ある教員養成プログラムとして開発が行われ、その効果が検証されはじめているところである[3, 4]。(1)については、平成22年度入学生から教員として必要な資質能力の最終的な形成と確認のために、教職実践演習が新設・必修化され、大学では、そのシラバス開発と授業方法について検討が行われ、実施段階に移行している。特に、教員として必要な資質能力が、これまでの授業履修や課外活動等を通して有機的に統合され形成されたかを大学の養成する教員像や到達目標に照らし合わせて確認することが必要となることから、各大学においては「養成する教員像」や「到達目標」を再度明確にすることが求められている。また、教科専門と教科教育や教科と教職をつなぐ科目の設置、実践的指導力を身につける教育実践に関わる授業科目の設置が行われている。さらに、到達目標や各授業科目間の関係を分かりやすく提示するためのカリキュラムマップの作成が愛媛大学をはじめとする多くの大学で行われている。(2)については、従来、フレンドシップ事業等として実施されてきた、地域や学校と連携しながら、児童・生徒を対象として、学生が主体となって大学内外において教育体験活動の企画・準備・運営、学校現場や様々な場において授業・保育アシスタント、放課後学習の支援やクラブ活動の補助等の教育ボランティア体験の実施などの教育現場における体験を(3)との関係で体験-省察の往還として

捉え、その体験プロセスにおいて、課題や目標の設定、課題や目標に対するアプローチ・行動の仕方の習得、学ぶ対象への気づきと理解、その対象の理解を深化させることへの意欲の向上、学生自身の変容、自他理解・自他評価等々が仕組みられたプログラムが、各大学において開発・実施されてきている。(1)や(2)における理論・実践・体験を学びとしてひきあげるためには省察活動が必須である。加えて、社会構造が大きな変動期を迎え人材の質がその社会の在り様を大きく左右する現在において人材育成は極めて重要な課題であるが、社会状況が急速に変化し人々の価値観が多様化するなかで、学校現場において複雑・多様化する様々な解決すべき課題に対応し、それらに対応しつつ日々変化する児童・生徒の教育に携わるためには、これまで以上に学び続ける意識を持つことが必要となる。ましてや、団塊の世代が退職し教員年齢構成の変化する時代のなかでは、協働性や同僚性を有しながら省察的実践家として研究と修養を進めていくことができる教員を育成することが重要となる。このような状況のなかで、教職ポートフォリオなどの実践活動と省察活動を結び付け、より有益な省察活動を支援するためのツールや省察活動自体の仕組みが検討されている。現在、ネットワークや情報携帯端末、情報蓄積・共有の利点を活かした電子的ポートフォリオが多くの教員養成系学部・大学において導入されてきている。これら(1)から(3)までの教員養成プログラムの開発・実施・運営にあたっては、(4)の大学教員自体の教職指導の充実が必要不可欠であり、指導充実のためのFD研修の在り方やプログラム開発が行われている[5]。また、教職に関する学部の委員会・業務部組織の在り方、コース・選修としての教職指導の在り方、これらの組織の教職指導に対する役割分担、さらに、教職指導に対する組織内・組織間連携の仕組みや具体的方法等を検討し、(1)から(3)の教育的効果を高め資質・能力の高い教員の育成を図ることができる組織づくりが行われている途上である。

これらの教員養成改革に関わる背景を踏まえ、我々は、成長し続ける教員を支える評価の在り方とその指標策定システムの構築を行うプロジェクトを開始した。このプロジェクトでは、大学教員と学生においては評価システムのイメージにずれがあり、両者の間を埋める評価指標(ミッシング・サイクル)の創出が必要なこと、また、到達目標自体が大学教員側から一方的に示される場合、学生にその意図が十分に理解されず、期待した効果が得られない恐れがあること、そして、到達目標の策定に当たっては、単なるトップダウンでなく、学生の側からみたボトムアップの仕組みを導入する工夫が必要であること等の問題意識を持ち、研究目的として、学生が自発的に研修をし続けることのできる枠組みを開発すること、さらに、複合的な評価サイクルを連携させる新たな評価指標策定システムの構築についても検討することを掲げている。本プロジェクトでは、山口大学教育学部小学校教育コースの学生を対象とし、開発した仕組みやシステムを適用しながら実践的に研究を進めている。

本稿では、特色ある教員養成プログラムの調査、特に、学生の自発的研修活動に関わる基礎的調査の結果について報告する。ここでは、特色ある取り組みを実施している3大学(広島大学、奈良教育大学、愛媛大学)の担当教員に対してインタビューを行い、各大学の取り組みの実態を把握して、本プロジェクトを効果的に推進するための有用な情報を得ることを目指した。

1. 小学校教育コースの教育目的・Graduation Policyとその特徴

上述したように複雑化・多様化している教育的諸課題に柔軟に対応できる課題解決的な実践力を有するためには、教員として学び続ける意識や省察的実践家としての力量を有することが必要である。また、自律的な学校運営(教員間の人間関係構築を含む)や大学卒業後の教員の専門的力量形成において、教員が互いに支え合いながら協動的に様々な課題解決を図っていく協働性や同僚性を有する教員集団の重要性が指摘され、いかにこのような文化を教員個人が有し、組織としての教員集団が共有するかがポイントとなる。特に、学級担任制という特徴を持つ小学校においては、様々な専門性を有した教員集団の強さを活かし、弱さをピアサポート等により補完し合う協働性や同僚性の文化を大学時代から育てていくことが必要とされ、そのような仕組みや装置を大学が用意することが求められている。山口大学教育学部では、図1に示すように、協働性や同僚性を育む仕組み、そして装置として平成17年度より「ちゃぶ台方式による協働型教職研修」を展開してきている。ここでは、学生が児童・生徒と継続的に関わることができる多様な場と、学生・現場教員・教育委員会・大学教員・地域住民等が協働して課題や失敗を分析・評価し、言語化して蓄積・共有化する省察の場(ちゃぶ台ルーム)を提供している。そして、様々な専門性を学んでいる異なるコース・選修の学生が、ここでの実践プログラムへの参加や課題解決、結果としての成功や失敗の共有等を通して相互補完的に

各学生の力量をむすびつけ、同僚性や協働性の意識、リーダーシップやマネジメントなどの力量を形成していくことを目指している。

この「ちゃぶ台方式による協働型教職研修」の方法論や成果を踏まえ、協働性と同僚性を核にさらに質の高い小学校教員を養成するために、教科専門性をベースに専門性と指導力を深めていく「教科教育コース」や「国際理解教育コース」に加えて、教育臨床をベースに子ども理解力や指導力を深め小学校教育における現代的課題にも対応可能な力量形成を目指す「小学校教育コース」を平成21年度から設置した。この養成方法論におけるキーワードは「相互補完性」であり、各コースにおける専門的力量的形成の上に、様々な場で専門的力量を活かし、また自分のウィークポイントを他者から学ぶ機会を通して、大学時代に他者から学ぶ／他者を支援する精神やお互いさまの意識を根付かせることにある。

小学校教育コースは、幅広い学年差や発達段階を考慮した「子ども理解」、その子ども理解を踏まえ子どもたちの意欲的な学びを配慮した「学習指導」、地域や保護者等との連携による「協働実践」の3つの柱を有した、体験（実践）一省察型の演習や授業科目を中心としたカリキュラムを展開している。コースの教育目的及びGraduation Policy は、次のとおりである。

【小学校教育コースの教育目的】

1. 現代の子どもがおかれた状況を総合的、実践的に理解し、適切な教育指導を行うことができる教員の養成。
2. 子どもの発達を総合的に理解するとともに、個にあった教育指導を洞察し実践できるための知識・能力をもった教員の養成。
3. 教育的課題等に主体的に取り組み、柔軟かつ創造的に解決をはかろうとする姿勢、およびそのために必要な基礎的力量的もった人材の養成。
4. 地域や学校などで、将来にわたって指導的役割が担える人材の養成。
5. 地域や学校の成員としての自覚を有し、共感的・協働的に活動できる人材の養成。

【小学校教育コースのGraduation Policy】

1. 人間の発達について系統的に理解するとともに、教育に関する実践や理論を踏まえ、効果的な教育指導の在り方について考察することができる。
2. 子どもの実態を総合的に理解し、目標、課題等を明らかにした上で、創意工夫しながら適切な教育指導を行うことができる。
3. 同僚や保護者、地域の人々と連携・協働し、多様な場面における子どもの教育指導を、総合的かつ創造的に実践できる。

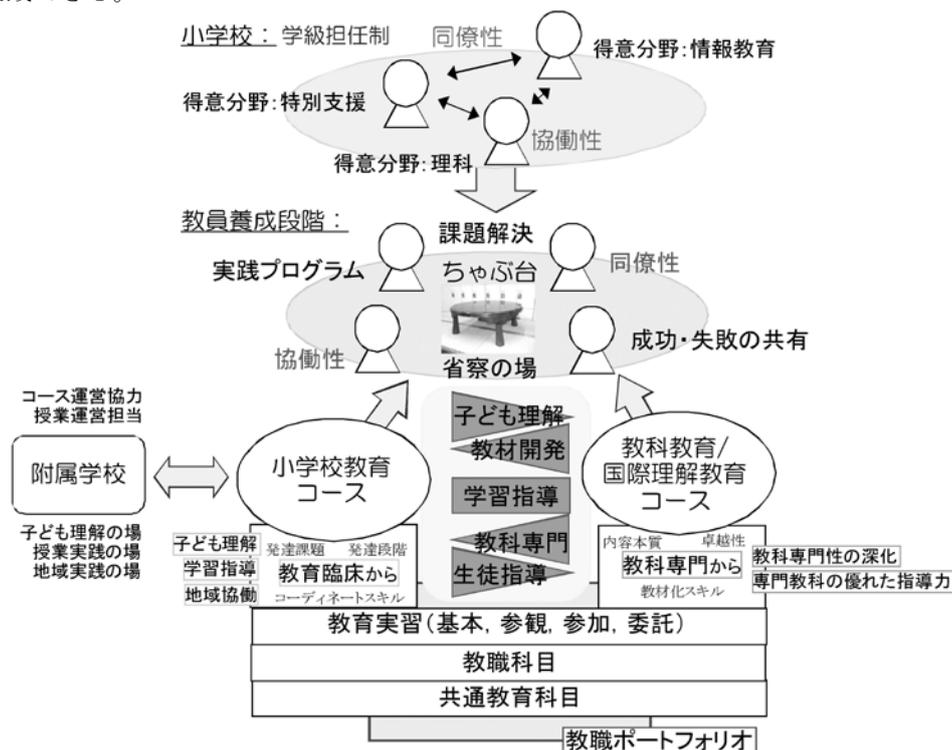


図1: 「ちゃぶ台方式」を活用した質の高い小学校教員養成の仕組み

I. カリキュラム構成の概要に関連して

- (1) 貴学の教員養成カリキュラムの名前があれば教えてください。
- (2) 教員養成カリキュラムの実施責任母体を教えてください。
- (3) 教員養成カリキュラムの特色を教えてください。
- (4) 教員養成カリキュラムの単位構成等の概要を教えてください。
- (5) 教員養成カリキュラム全体の評価方法の構成について教えてください(例えば、「授業科目と評価観点の組み合わせの表などはあるか」などを知ることができれば助かります)。
- (6) 講義系科目と実習系科目の配分について教えてください。
- (7) 教職実践演習への準備状況について教えてください。
- (8) その他、自由インタビュー

II. 育成する人材像としての教師に関連して

- (1) 教員養成に関する各大学・学部の特徴をどのようにカリキュラムに反映させていますか？ 学部が持っている育てたい教員像を具現化する際に、それを課程認定で必要になる科目以外のところで授業科目群として揃えていますか？ それとも課程認定の授業内容で特色を出されているのでしょうか？ また、各大学の教員養成の特色をどのように出していくべきかについてご意見を伺えれば幸いです。
- (2) 教職実践と振返りに関する活動を正規の授業カリキュラムに組み込まれていますか？ それとも、そのような活動は課外の活動と位置づけられていますか？ あるいは、共通に正規の授業として何単位かを課し後は課外活動にされているのでしょうか？ その際の教職実践と振返りの教員養成カリキュラムにおける位置づけ・理念はどのようなものなのでしょうか？ そのあたりをお伺いできれば幸いです。
- (3) 最近は教職スタンダードを各大学がつくり、それを学生が自己評価、他者評価、教員評価をすることが主流になりつつありますが、日本における教職スタンダードのもつ本質的な意味をどのようにお考えですか？ その本質を踏まえて、学生が有意義な学び・振り返りをするための仕組み、特に、教員側で上手に環境づくり・指導できる組織構成や方法を実践、あるいはお考えがあれば、お伺いできれば幸いです。
- (4) 様々な考えを有している教員集団で構成されている組織のなかで、学生の教職力を質的に向上させていくために、教員養成について、同じ方向性を持って進めていくための良い施策やアイデアをお持ちではないでしょうか？ すでに実践されている、あるいはお考えがあれば、お伺いできれば幸いです。

III. 『学生の成長と関わってカリキュラムをどう評価するか』、『学生及び保護者などデマンドサイドの満足度がどのように存在するか』に関連して

- (1) どのような教員を養成しようとしているのか。例えば、中教審等に示される教員の資質能力を育成するために、カリキュラム構成や内容、教員（方法学と内容学、教育学など幅広い教員）の意識や連携にどのような工夫がなされているのか。お伺いできれば幸いです。
- (2) カリキュラムの構成及び内容について、地域や学校現場との連携は図られているか。図られているとするなら、その窓口や評価の方法、留意点についてお伺いできれば幸いです。

図2：今回設定したインタビュー項目リスト

本コースでは、体験-省察型の学習活動をベースにしているため、学びを深めさせる省察プロセスをいかに学びに対して実効性ある仕組みとして提供できるかがポイントとなる。この省察プロセスを活性化させるためのツールとして「発見ノート(学習面だけではなく生活面をも対象にして、各自の目標や課題、気づきや学びを学生個人の評価基準のもとで書いていくことができるノート)」を導入している。すでにこのノートを活用して、各自の振り返りや他者の発見ノートへのコメント書きによるピアサポート、学びの共有化などを実践しているが、さらなる実効性ある発見ノートの利用方法やeポートフォリオとしての発展可能性、大学教員FDとの関連性などを検討することが必要であると考えている。

2. 特色ある教員養成プログラムを実施する大学に対する情報収集の方法と内容

本稿では、広島大学教育学部の初等教育教員養成コース、愛媛大学教育学部、奈良教育大学の3大学における特色ある教員養成プログラムの取り組みについてインタビューを行うこととした。インタビュー時期は、2011年12月である。インタビューは半構造的に行い、インタビュー項目については、小学校教育コース内において事前にインタビュー項目を募り、得られた項目についてインタビュー対象者にできる限り順番通りに質問するという手続きをとった。図2にインタビュー項目を示す。

3. 各大学における取り組み事例

3-1 到達目標型教育プログラム「HiPROSPECTS」と教職実践演習の取り組み（広島大学教育学部）

広島大学では学士課程教育の質保証として、到達目標型教育プログラム「HiPROSPECTS」を開発している。このプログラムは、社会の変化に対応するために到達目標型教育への転換を図り構築された広島大学独自の学士課程教育システムである。HiPROSPECTSの概要を図3に示す。

さらに、広島大学教育学部におけるインタビュー結果から、「教員養成の特徴を課程認定科目に反映されていることや教職実践と振り返りに関する活動を教員養成科目（小学校教育実習入門、小学校教育実習観察、教職入門等）として組み込まれている」等の状況が分かった。また、「学生が養成段階、就職後10年、20年と持続的に成長し続けることができる自己研修のための物差しを教職スタンダードとして捉えられること」や、「学生のニーズや特徴を把握すること」、「教員養成の方向性をともにして進めるためにパンフレットも含めた具体物を作成しそれらを利用して方向性を共有すること」、「育てたい教員像を明確にしてそれをカリキュラムにあてはめていくこと」、「カリキュラムや授業名等に関しては外部からみても分かりやすいこと」等の重要性について指摘を受けた。

さらに、広島大学教育学部初等教育教員養成コースの取り組みとして、「教職実践演習」の開発的取り組みを紹介する。平成21年度に実施された「教職実践演習」（試行）の教職実践演習モデルを図4に示す。初等教育教員養成コースにおいてこのモデルを試行した結果、学生の多くから肯定的な評価を得たことが報告されている。その理由については、例えば以下のような内容が挙げられている。

- ・受講生の高い意欲
- ・少人数編成による実施

また、今回の試行に対する課題として、以下のような7つの項目が挙げられている。

- ・少人数編成による指導体制の実現
- ・受講意欲への対応
- ・コース決定等授業構成の検討
- ・実施スケジュールの策定
- ・評価と単位認定の検討

主専攻プログラムによる「卒業生の質の確保」及び「卒業生の質の確保を裏付けるカリキュラムの構築」は、以下のPDCAサイクルで実現していく。

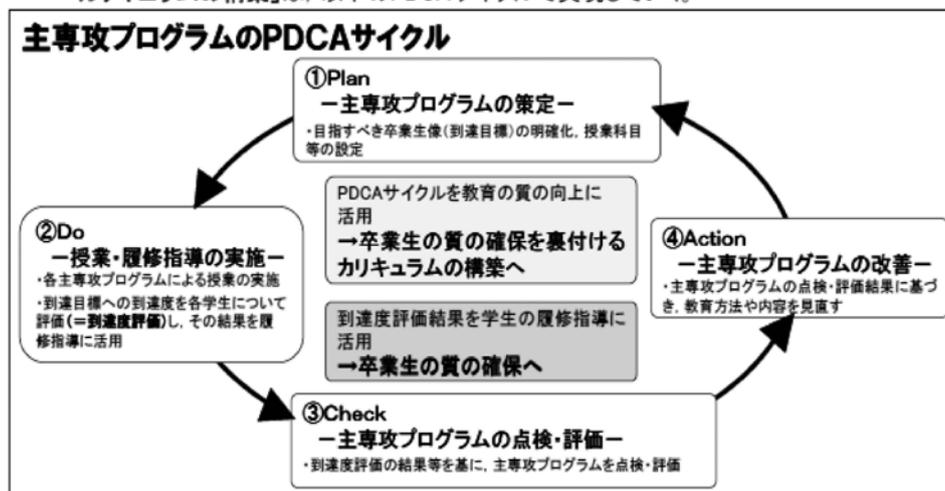


図3：到達目標型教育プログラム「HiPROSPECTS」のPDCAサイクル(文献[6]から引用)

期 (内はコマ数)	内容				形態
第1期(4) 資質の確認	オリエンテーション 個別面談・履修相談		学びの履歴 コース選択と履修計画		一斉・ 小集団・ 個別
第2期(8) 資質向上の ための取り組み	A授業研究コース (模擬授業・研究会参加等)	B学校実務コース (学校ボランティア活動への参加等)	C教育課題研究 コース(シンポジウム・ディベートの開催等)	Dかわりコース (コミュニケーション講座・地域ボランティア活動への参加等)	個別・ 小集団
第3期(3) 振り返り	取組の交流 自己評価	ポートフォリオの完成 個別面談			一斉・ 小集団・ 個別

図4：広島大学「教職実践演習」(試行)の教職実践演習モデル(文献[6]から引用)

- ・推進組織の創設
- ・明確化など運営体制の確立
- ・人的支援体制づくり

これらの課題項目を検討し、広島大学では、平成24年度からコース所属の全学生を対象とした「教職実践演習」を実施する予定である。

3-2 職能成長プロジェクトの取り組み(奈良教育大学)

インタビューは、奈良教育大学「職能成長プロジェクト」の担当教員に行われた。今日、高い資質能力を備えた有能な教員及びその教員を養成する質の高い教員養成が社会から求められており、教職実践演習の導入や学士力保証などは、これら社会的要求に応える教育・教員養成改革の重要なテーマである。この職能成長プロジェクトでは、入学時から4年間の学生の職能成長プロセスと一体化した統合型教職実践演習のカリキュラム及び授業モデル、デジタル教材の開発を行うことが目的とされている。このカリキュラム及び授業モデルの開発を通して、学士課程における学生の質保証と知識注入型・トレーニング型の教員養成から課題解決・省察型の教員養成への転換が目指されている。奈良教育大学の職能成長プロジェクトの全体図を図5に示す。このプロジェクトでは、6つのサブプロジェクト(課題解決・省察型教員養成授業モデルの開発)

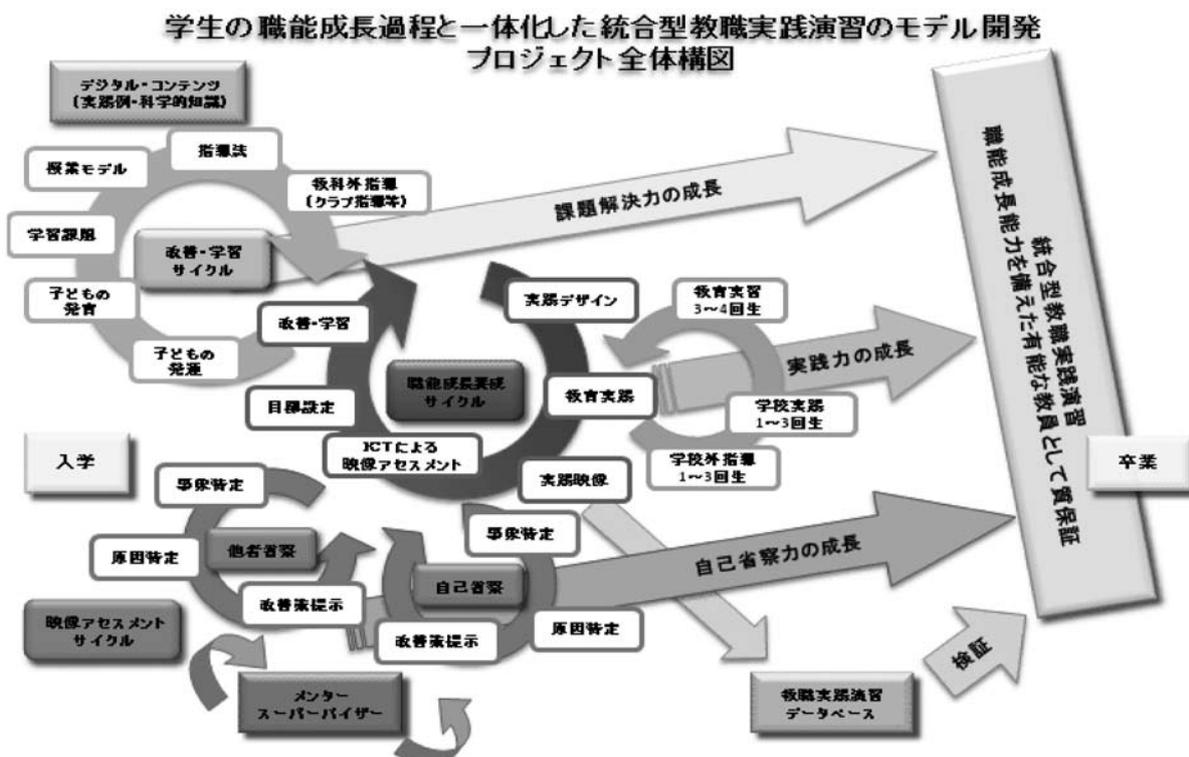


図5：奈良教育大学の職能成長プロジェクトの全体図(文献[7]から引用)

プロジェクト、教育実習アセスメント・プロジェクト、教育用デジタル・コンテンツの共同開発プロジェクト、メンター・プロジェクト、カリキュラム・アセスメント・プロジェクト、統合型教職実践演習カリキュラム・プロジェクト)が組み合わされて展開されている。

これらのサブプロジェクトの成果として、学生に対してカリキュラムや教育実習、メンター制度や教育用デジタル教材が提供され、4年間の大学生活における自己成長の確認と学びをガイドするためのWebによる自己記入型ポートフォリオ「PASS（職能成長アセスメント支援システム, Professional Development Assessment Support System）」が開発・運用されている。このPASSは、次の特徴的な5つの機能を有している。

- ① 教師力の自己診断機能
- ② 教師を目指す上で必要な力を身につけるために必要な授業科目紹介機能
- ③ 教師を目指す上で必要な力を身につけるために必要なデジタル教材紹介機能
- ④ 教育実習の実習授業映像振返り機能
- ⑤ 学習成果（映像データや資料・レポートのデータ等）の保存機能

このポートフォリオシステムでは、自己診断の結果を利用して必要な授業科目及びデジタル教材を推薦できる機能は興味深い。また、教育実習の授業映像から授業実践の学びを深化できる機能は有益であり、他者との学び合い、学びの共有化へと発展が期待でき、より深い学びを提供できる可能性を有している。

3-3 FIC(Friendship Information Center)システムを中心とした教職支援の取り組み（愛媛大学教育学部）

愛媛大学教育学部は、地域の学校・教育機関との連携のもとで、学生の主体的な参加による教育体験活動（地域連携実習）に積極的に取り組み、これらの活動等の教職支援に対して教職ポートフォリオシステム（FIC[Friendship Information Center]システム）を開発・導入している。FICシステムには、次の機能が実装されている。

- ① ユーザの登録機能と承認機能
 - 氏名，連絡先，保険加入状況，参加決意100文字以上等の登録情報
 - ユーザ名とパスワードは全学システムと連動
- ② 学生のプログラム登録機能と承認機能
- ③ プログラム(フォーラム)に関する情報提供機能
 - 学生は所属するプログラムのみ閲覧可能
 - 協力学校は自校が提供するプログラムのみ閲覧可能
- ④ 実施計画書及び実施報告書作成機能
- ⑤ システム管理機能
 - 全員宛/プログラム宛メール送信機能
 - 実施プログラムの参加者リストをFAXする機能

また、このシステムは、学生の实践活动や省察活動を支援するだけでなく、連携先の学校・教育機関との連絡や情報交換等をしやすくするような機能がデザインされ、実装されている。

教職ポートフォリオの在り方については、アセンブリポートフォリオとセレクトティブポートフォリオの両方が重要であることは間違いないが、共有するポートフォリオとしないポートフォリオをわけることが必要であるとの認識の上で、学生自身が活動のエッセンスを抜き出す、「授業で何を学んだか」の結果をまとめる等々、学生がアピールすべきことをポートフォリオに残していくことの大切さを指摘されている。「アピールするモノを作っていくなら、学生もポートフォリオとして残していこうとするだろう」という発想である。学生も教員もポートフォリオに関してまじめに取り組んで量が増えてしてしまうと破綻してしまう可能性もある。それでは意味がないので、両者が無理をしない、つまり、ポートフォリオとして見える部分の質があがっていき、教員の負担も減る仕組みを取り入れていくことも実効性をあげるという観点では必要なことであることが指摘された。視察時の有用な観点は下記のとおりである。

[1] 地域連携実習を実施するための時間割の工夫について

愛媛大学では、各学年で「地域連携実習」の時間を、時間割上、1週間に2コマ分、しかも、2時間目、3時間目を中心に確保されている。この時間は、基本的には実習の時間として活用されるが、学部やコースの学生達を集めるのに必要な時間としても利用されている。

[2] 下級学年に対する上級学年の利用方法について

先輩の助言や示唆は、後輩にとってうれしいものであり、教員の意見以上によく聞き入れることもある。また、教員採用試験に合格した先輩のようになりたいというのは到達可能な目標で受け入れやすい。この年代が近いので共振しやすい特徴を考慮すれば、上級学年を利用したピアレビュー等が有効である。教職ポートフォリオシステム上でフォーラムが作れば、いつでもピアレビューが可能になる。

[3] デジタルポートフォリオとアナログポートフォリオの共存について

アナログのポートフォリオは重要であるが、スマートフォン等情報携帯端末を利用して思った時に書ける部分も必要である。両者をどのように共存させて、スムーズにできるかがポイントとなる。

[4] 教育支援士の役割の重要性について

愛媛大学の事業では、事業に関する活動時間が時間割上に確保されていること、さらに、FICシステムが稼働していることが事業を成功させる要因となっていると思われるが、教育支援士も大きな役割を担っていると思われる。それは、大学教員でもなく、教育現場の先生でもない教育支援士の先生になら、コースや選修の壁がなく、また、時にはプロジェクトやプログラムの愚痴や学校・先生への対応方法などを気軽に相談でき、支援や指導を受けやすい。これらの点から事業成功の大きな要因の一つとして、教育支援士の重要性が指摘できる。

おわりに

本稿では、特色ある教員養成プログラムの調査、特に、学生の自発的研修活動に関わる基礎的調査の結果について報告した。今後、調査させて頂いた広島大学、奈良教育大学、愛媛大学の取り組みを参考にして、本プロジェクトの推進、特に、省察プロセスの改善、発見ノートの利用方法（到達目標設定に対するトップダウンとボトムアップの組み合わせ等）、学習指導に関わる体験活動へ興味・関心を抱かせる手立て・手法の確立などに役立たせたいと思う。

謝辞

今回の調査にご協力頂いた広島大学、奈良教育大学、愛媛大学の関係者の方々に感謝申し上げます。なお、本研究の一部は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C) [課題番号:23501149]の援助を頂いて実施しています。

参考・引用文献

- [1] 中央教育審議会：今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)，文部科学省，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910.htm，2006.
- [2] 文部科学省：教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について，文部科学省，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1294550.htm，2010.
- [3] 宮本正一：岐阜大学教員養成モデル・コアカリキュラム（ACTプラン）の効果，岐阜大学教育学部教師教育研究，vol.6，pp.7-28，2010.
- [4] 藤村法子，坂梨學：教師に求められる実践的指導力を養成する教職専門実習のあり方 -教職専門実習I・IIの実践を通して-，京都教育大学教育実践研究紀要，vol.10，pp.221-230，2010.
- [5] 井上史子，沖裕貴，金剛理恵：実践的FDプログラムにおける大学教員の教授・学習支援能力の検討 -オランダにおける「基礎教授資格」(BTQ)を参考にして-，立命館高等教育研究，vol.10，pp.125-140，2010.
- [6] 広島大学：HiPROSPECTS，<http://www.hiroshima-u.ac.jp/prog/hipro-pr/index.html>，2012-01-17 access.
- [7] 奈良教育大学：職能成長プロジェクト，<http://pd.nara-edu.ac.jp/>，2012-01-17 access.
- [8] 愛媛大学：教育支援ルームによろこそ！，<http://tdsr.ed.ehime-u.ac.jp/groups/workgroup/>，2012-01-17 access.